

研究ノート

## 『摩尼十万語』の基礎的研究(2)

——第1巻セクション8所収「大悲者の成就法」の部分訳とテキストのローマナイズ——

Basic Research on the *Maṇi bka' 'bum* (2):

A Translation and Romanization of Selected Passages in Section 8 of Volume I

佐久間留理子\*

SAKUMA Ruriko

The *Maṇi bka' 'bum* is a collection of texts concerning Tibetan King Srong btsan sgam po (A. D. 581-649), in which the king is described as the incarnations of the Bodhisattva Avalokiteśvara. This collection is a part of the literature known as “hidden treasure” (gter ma), which is said to have been mysteriously discovered. In fact, The *Maṇi bka' 'bum* was compiled around the fifteenth century in Tibetan Buddhism. The entire *Maṇi bka' 'bum* collections is divided into three sections, namely the “Sūtra section,” and “Sādhana section,” and “Sections of instructions.” This study aims to present a translation and romanization of selected passages in Section 8 of volume 1, included in the “Sādhana section” describing visualization in Esoteric Buddhism.

キーワード：チベット仏教 (Tibetan Buddhism)、ソンツェン・ガンポ (King Srong btsan sgam po)、成就法 (Visualization)

## 1. はじめに

## (1) 研究の目的・先行研究

チベットの建国王であるとともに、観自在<sup>1</sup>の化身として信仰されてきたソンツェン・ガンポ (Srong btsan sgam po)(A. D. 581-649)は、「埋蔵経典」(gter ma)と総称される典籍の一つである『摩尼十万語』(*Maṇi bka' 'bum*)を著したと伝えられる。また、それは12世紀から13世紀にかけて3人の経典発掘者(gter ston)によって発見されたという伝承がある。しかし、実際には15世紀頃に、それまで主に口伝で伝承されてきた観自在信仰が現行の形としてまとめられたものであると考えられている<sup>3</sup>。本稿では、インドで成立した観自在信仰が、チベット仏教においてどのように受容され、変容したのかという視点から『摩尼十万語』第1巻のセクション8「大悲者の六重の部」の第五の部に含まれる「大悲者の成就法」(thugs rje chen po'i sgrub thabs)(MKB<sup>4</sup> vol. 1, 519, 4-563, 4)の中、「三摩耶薩埵の輪の修習」(dam tshig sems dpa' 'khor lo)(MKB, vol. I, 533, 4-541, 1)を取り上げる。そこには、四臂観自在(六字観自在)を本尊とするマンダラ観想が説かれるが、その源泉は、インド後

<sup>1</sup> 「観自在」は、玄奘による新訳であり、サンスクリット語の原語「アヴァローキテーシュヴァラ」(Avalokiteśvara)に即した訳語である。また、チベット語の「チェンレーシク・ワンチュク」(sryan ras gzigs dbang phyug)もまた、「観自在」に対応する。他方、「観世音」という名称も知られるが、それは鳩摩羅什による旧訳で、「世の衆生の救いを求める声を聞いて救いを与える」ことを意味する(速水, 2000, p. 44)。日本においては「観世音」、「観音」とも呼ばれるが、本稿では上述のサンスクリット語の原語やチベット語に対応する「観自在」の名称を用いる。

<sup>2</sup> (山口, 1988, p. Xiii).

<sup>3</sup> (山口, 1988, p. 789; Kapstein, 1992, pp. 79-93; 163-169; 石濱 2001, p. 23 注 26, p. 223 注 1; 楳殿, 2021, pp. 14-17, 谷口 2023, p. 768).

<sup>4</sup> MKB は、『摩尼十万語』のプナカ版木版印刷本を指す。これは、Trangyang and Jamyang Samten (1975)によって出版される。MKB は、『摩尼十万語』のチベット語である *Maṇi bka' 'bum* における下線部分の文字を抽出した略号である。

期密教の成就法集成である『サーダナ・マーラー』(*Sādhnamālā*) 所説の六字観自在の成就法<sup>5</sup> (密教的観想法) や 7 世紀初頭に西北インドで成立した『カーランダ・ヴューハ・スートラ』(*Kāraṇḍavyūha-sūtra*) 所説の「六字大明マンダラ」<sup>6</sup>にあると考えられる。今後これらのインド資料とチベット資料とを比較するための基礎的研究として、本稿において『摩尼十万語』第 1 巻セクション 8 に含まれる「大悲者の成就法」の部分訳 (逐語訳) とテキストのローマナイズを行う<sup>7</sup>。また、当該箇所には説かれる内容と『サーダナ・マーラー』所説の六字観自在の成就法、及び『カーランダ・ヴューハ・スートラ』所説の「六字大明マンダラ」との共通点と相違点についても若干の指摘を行う。

なお、原典テキストは、ブータンのプナカ版<sup>8</sup>を使用し、部分訳に際しては英訳<sup>9</sup>を参照した。先行研究では、槇殿 (2021a, pp. 215-491) が、『摩尼十万語』第 1 巻セクション 1 第 1-36 章の和訳とテキスト校訂を公表する。また、槇殿 (2021b) は、『摩尼十万語』の如来蔵思想について考察する。さらに、谷口 (2023) は、仏身説に焦点を当てた研究を行う。さらにまた、佐久間 (2023, pp. 33-43) は、『摩尼十万語』第 2 巻第 44 章の部分訳とテキストのローマナイズを公表する。しかし、本稿で取り上げる箇所の和訳とテキスト校訂は、先行研究では公表されていない。従って、本研究によって新たな基礎的資料を提示することができる。

## (2) 研究の背景

筆者は、これまでに『摩尼十万語』における六字観自在の成就法の研究を行ってきた (佐久間, 2023a; 2023b)。本稿はそれらの研究を発展的に継続した続編である。

## 2. 「大悲者の成就法」所説の「三摩耶薩埵の輪の修習」

### (1) 『摩尼十万語』における第 1 巻セクション 8 の「大悲者の成就法」の位置とその内容構成

『摩尼十万語』の内容は、「経類」(mdo skor)、「成就(法)類」(sgrub skor)、「口伝類」(zhal gdams kyi skor) の三つの部門に大別される<sup>10</sup>。本稿で取り上げる第 1 巻セクション 8 に含まれる「大悲者の成就法」は、これらの中、成就(法)類に含まれる。この成就法は、準備的部分 (MKB vol. I, 519, 4-532, 4) と中心的部分 (本尊とその脇侍を観想しそれらと一体化する内容) (MKB vol. 532, 4-563, 4) から構成される。今回取り上げる「三摩耶薩埵の輪の修習」は後者の一部である。

トウッチ (1984: 153) によれば、「三摩耶薩埵」(Skt. samayasattva, Tib. dam tshig sems dpa') は、「精神集中の対象である本尊に理念的に変容した行者が、一時的にその姿をとる『約束の存在』」である一方、これと対になる智薩埵 (Skt. jñānasattva, Tib. ye shes sems dpa') は、「(無始以来存在する根源的な元型に相当する) 本尊の『投影』である」と解釈されている。言い換えれば、三摩耶薩埵は、行者が思い描いた仮の姿の本尊 (行者でもある) であるのに対し、智薩埵は真理 (悟り) の世界から到来する本質的な姿の本尊と言える<sup>11</sup>。この「大悲者の成就法」の場合には、三摩耶薩埵は、「三摩耶薩埵の輪」(dam tshig sems dpa' 'khor lo) と述べられているように、本尊のみならず、その脇侍を含めた広い領域が想定されている。また、三摩耶薩埵と対になる智薩埵は、「大悲者の成就法」では「三摩耶薩埵の輪の修習」の直後に述べられている (MKB vol. I, 541, 1-4)。行者は、これらの三摩耶薩埵と智薩埵とを一体化させることによって、最終的な本尊との合一を果たすものと考えられる。

<sup>5</sup> 下記の注 17 を参照。

<sup>6</sup> 下記の注 31 を参照。

<sup>7</sup> ローマナイズは、将来、本稿で使用したプナカ版の他に、グンタン版・ラサ版等を使用してテキスト校訂を行うための基礎的作業である。

<sup>8</sup> (Trangyang and Jamyang Samten, 1975). 略号(MKB).

<sup>9</sup> (Trizin Tsering Rinpoche, 2007, vol. I, pp. 813-821).

<sup>10</sup> (Kapstein, 1992; 槇殿, 2021a, pp. 15-16)

<sup>11</sup> 三摩耶薩埵と智薩埵は、インド中期密教を代表する経典の一つ『初会金剛頂経』にも説かれる (トウッチ, 1984, p. 170, 注 17, ロルフ・ギーブルによる訳注) (堀内, 1983, p. 147)。三摩耶薩埵と智薩埵に関する先行研究には、トウッチ (1984)、肥塚 (1967)、清水 (1977)、奥山 (1999)、佐久間 (1993)、森 (2000)、立川 (2004) 等がある。

## (2) 「三摩耶薩埵の輪の修習」の概要

行者が観想する三摩耶薩埵の輪が、六つの内容、即ち、五つの悟りの顕現並びに加持<sup>12</sup>によって教示される。第一の悟りは、空性に関するものである。それは、一切の法(存在)の現われには自性(rang bzhin)<sup>13</sup>は無いと認識して瞑想することによって実現される。第二の悟りは、利他に関するものである。それは、一切の生類に慈悲を思念して、大悲を瞑想することによって実現される。第一、第二の悟りは、理念的であるのに対し、第三の悟り以降は、具体的な表象をとまなう。第三の悟りは日と月と蓮華に関するものである。それは、不二の方便と知恵を表す日と月と蓮華の座が一つになったものを思念することによって実現する。第四の悟りは、文字と持物に関するものである。それは、日と月と蓮華の座の上に、白いフリーヒの文字が光に溶けることによって、白い蓮華の持物(本尊である観自在の持物)となるのを思念することによって実現する。第五の悟りは、完全に備わった本尊の身体に関するものである。それは、持物(白い蓮華)が光に溶けてから、行者自身が本尊である一面四臂の大悲者(六字観自在)になるのを観想することによって実現する。この観自在は、右の第一の手に真珠の輪を持ち、左の第一の手が蓮華の茎を持つ。また、残りの二本の手は、胸の上で結ばれている(胸の上で合掌している)。さらに、両足が等しく組まれた脚勢(結跏趺坐)で座す。

次に、一切の善逝(仏)の身(身体活動)、口(言語活動)、意(心的活動)の精髓を表す三つの文字によって、行者は自らの身、口、意の三つを加持する。その後、行者は、自らの身体の端に金剛の鎧・火山の輪を観想して、障害物から自身を防護する。

付随的な観想では、三千大千世界が千の花弁のある蓮華の仏国土となるのを観想する。また、要約的な観想では、毘盧遮那仏、金剛薩埵、宝生仏、阿弥陀仏、不空成就仏を観想した後、それらの諸仏の外周の蓮華に六波羅蜜の六女神を観想する。さらに、それらの女神の外周の蓮華に六人の聖者、即ち、インドラ(帝釈天)、阿修羅、釈迦牟尼、釈迦獅子、虚空庫(菩薩)、法王を観想し、六道の一切の生類がこれらの六人の聖者になるのを修習する。さらに、極めて要約的な観想では、(本尊の)前方に六字の女神を、(本尊の)右にマニダラ(宝石を持つもの)を、(本尊の)左にヴィディヤダラ(持明者)が存するのを観想する。

## 3. 部分訳(逐語訳)とテキストのローマライズ

翻訳に際しては語句を補い、それらを斜体で示した。また、内容を整理するため、便宜的にカギ括弧内に番号を記した。

### [0] 概略

最初に生起する次第は、三摩耶薩埵の輪を修習することである。それは五つの悟りの顕現並びに加持とで合計六つによって教示される。五つの悟りは、次の通りである。空性についての悟りが第一である。利他的大悲についての悟りが第二である。太陽と月の座についての悟りが第三である。文字と持物についての悟りは第四である。完全に備わった本尊の身体についての悟りが第五である。身(身体活動)、口(言語活動)、意(心的活動)の加持とで、合計六つなのである。

(MKB, vol. I, 533, 4) (dang po skyed pa'i rim pa dam tshig sems dpa' 'khor lo sgom pa ni/ mngon par chang chub pa lnga byin gyis brlabs pa dang drug gis ston te/ byang chub pa lnga la/ stong pa nyid las mngon par byang chub pa dang

<sup>12</sup> 『加持』とは、一般的に言って、聖性の位階のより上のものから下のものへ『聖なる』力を付与することをいう(立川, 2015, p. 186)。本文の[6]の段落では、善逝(仏)の身、口、意の精髓を表す三つの文字によって、行者は自らの身、口、意の三つを加持する。

<sup>13</sup> 「自性」は、仏教では重要な概念である。「もろもろの性質の中のもっとも特徴的な性質、例えば火ならば熱さ、水ならば湿り気、地ならば堅さが自性として認められ、自性とその自性以外のもろもろの性質との総和が『もの』である」と理解されている(立川, 2021, p. 149)。

gcig/ gzhan don snying rje chen po las mngon par byang chub pa dang gnyis/ gdan nyi zla padma las mngon par byang chub pa dang gsum/ yig 'bru phyag mtshan las mngon par byang chub pa dang bzhi/ sku yongs su rdzogs pa las mngon par byang chub pa dang lnga/ sku gsung thugs byin gyis brlob (sic.)<sup>14</sup> pa dang (534, 1) drug go/)

### [1] 第一の悟り

第一の空性自身についての悟りは、常見<sup>15</sup>という偏見を取り除くものである。「即座にこのように現れた一切の法が、自性を欠いていると瞑想する」というのには、次のような理由がある。なぜならば、最初に、このような事物の現実性と確からしさを有する現れ、即ち凡夫によって知覚において真実で常住なものとして捉えられるもの、これは本質的には認識されないことによって、常見という偏見が取り除かれるからである。即座にこのように現れる一切の法の現れには、自性はない。光明における無思考、誕生の無い不生という不生として、一切の法の現れを瞑想する。以上が、鏡智の鑑なのである。

(dang po stong pa nyid pa nyid las mngon par byang chub pa ni/ rtag pa'i mtha' ba sal ba yin te/ skad cig ma las 'di ltar snang ba'i chos thams cad rang bzhin med par sgom zhes pa/ dang po kho na 'di ltar gyi snang ba dngos po nges pa can/ tha mal gyis shes pa la bden pa po rtag par bzung ba 'di rang bzhin nyid kyis mi dmigs pas rtag pa'i mtha' bsal ba'i phyr/ skyad cig ma las 'di ltar snang ba'i chos thams cad snang la rang bzhin med pa/ gsal la rtog pa med pa/ ma byung ma skyes skyes ba med par sgom/ de ni me long bu'i ye shes kyi go cha'o//)

### [2] 第二の悟り

第二の利他についての悟りは、断見<sup>16</sup>の偏見を取り除くものである。「空性を認識しない者たちに対して広がる大悲を瞑想する」というのには、次のような意味がある。第一に、生類に対して慈悲が尽くされてないならば、小さな乗り物になるのである。空のみに執着してもまた断見の偏見になるので、空性と慈悲を結びつけて瞑想する必要があるから、空性を認識せずに、事物と特徴に執着する一切の生類に、慈悲を思念して、偏りのないように広がる大悲を瞑想するのである。以上が、法界智の鑑なのである。

(gnyis pa gzhan don las mngon par byang chub pa ni/ chad pa'i mtha' bsal ba yin te/ stong nyid ma rtogs pa rnam la khyab pa'i snying rje chen po sgom zhes pa dang po kho na sems can la snying rjes ma zin na theg pa chung ngur 'gro/ stong pa kho na la zhen kyang chad pa'i mthar 'gro bas/ stong pa dang snying rje zung 'brel du sgom dgos pas stong pa nyid ma rtogs par dngos po dang mtshan mar zhen pa'i sems can thams cad snying re rje na snyam du phyogs ris med par khyab pa'i snying rje chen po sgom mo// chos kyi dbyings kyi ye shes kyi go cha'o//)

### [3] 第三の悟り

第三の日と月と蓮華についての悟りは、次の通りである。「パムより生じた千の花弁を有する赤い蓮華を思念する。アより生じた月の座を、また、マより生じた日輪を思念する」というのは次の通りである。パムより千の花弁を有する赤い蓮華を、千二の仏が坐す場所であるか、あるいは、世界として思念する。それは、三界を輪廻する過失によって覆われていないのである。アより方便の本質である月を、マより知恵の本質である日輪を、蓮華の中央の中心に、不二の方便と知恵として、日と月と蓮華の座が一つになったものを思念するのである。これが、平等性智の鑑である。

(gsum pa gdan nyi zla padma las mngon par byang chub pa ni/ pam las padma dmar po 'dab ma stong dang ldan pa bsam/ a las zla ba'i gdan/ ma las nyi ma'i dkyil 'khor bsam/ zhes pa pam las padma dmar po 'dab ma stong dang ldan

<sup>14</sup> 現在の正書法では brlabs が正しい綴りである。

<sup>15</sup> 「常見」は、「断見の対。世界は常住不滅であるとともに、人は死んでも我（アートマン）が永久不滅であると執着する誤った見解」である（中村, 2001, pp. 843-844）。

<sup>16</sup> 「断見」は、「世間および自己の断滅を主張して、因果の理法を認めず、また人は一度死ねば断滅して再度生まれることがないとする誤った考え」である（中村, 2001, p. 1157）。

pa (535, 1) sangs rgyas stong rtsa gnyis bzhugs pa'i gnas sam zhing khams su bsam ste/ khams gsum 'khor ba'i skyon gnyis ma gos pa'o/ a las zla ba thabs kyi rang bzhin/ ma las nyi ma'i dkyil 'khor shes rab kyi rang bzhin/ padma'i dbus kyi lte ba la/ thabs shes rab gnyis med nyi zla padma'i gdan kha sbyar bsam mo// mnyam pa nyid kyi ye shes kyi go cha'o//)

#### [4] 第四の悟り

第四の文字と持物についての悟りは、次の通りである。「日と月と蓮華の座の上に、白いフリーヒの文字が光に溶けることによって、白い蓮華の持物となるのを思念する」というのは、以下の次第による。日と月と蓮華の上に自らの身体を見ることなく、心臓の白いフリーヒの文字によって浄める。フリーヒから白い光を広げて、十方の一切の仏と菩薩に、彼らの身、口、意を喜ばせる供物を捧げる。三界の六道の生類の苦しみと障害を取り除き、口（言語活動）の文字であるフリーヒが光に溶けた後、意（心的活動）の持物である白い蓮華となるのである。それに関して、仏菩薩が輪廻における生類の利益をなさなくても、輪廻の過ちに覆われない。これが、妙観察智の鎧なのである。

(bzhi pa yig 'bru phyag mtshan las mngon par byang chub pa ni nyi zla padma'i gdan gyi stengs su/ hrīḥ dkar po 'od du zhu bas phyag mtshan padma dkar por gyur par bsam/ zhes pa nyi zla padma'i stengs su rang gi lus mi dmigs par/ snying ka'i hrīḥ dkar pos sbyangs/ hrīḥ las 'od zer dkar po 'phros pas/ phyogs bcu'i sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la sku gsung thugs mnyes pa'i mchod pa phul/ khams gsum 'gro drug gi sems can gyi sdug bsngal dang sgrib pa sbyangs nas hrīḥ gsung yig 'bru 'od du zhu ba las/ thugs phyag mtshan padma dkar por gyur to// de ni 'khor bar sems can gyi don mdzad kyang 'khor ba'i skyon gnyis ma gos pa/ so sor rtog pa'i ye shes kyi go cha'o//)

#### [5] 第五の悟り

第五の完全に備わった本尊の身体についての悟りは、次の通りである。「持物が光に溶けてから、行者自身が一面四臂の大悲者<sup>17</sup>となる」というのは、以下の次第による。意（心的作用）であるその持物の蓮華から光の拡散と収斂を行い生類の利益をなして、自身の身体が大悲者の身体となる。一面は、生類に変わることはない慈悲をなす。優しい行為によって、微笑む表情をもち、じっと見つめる赤い二つの目は生類を慈悲によって見るのである。四臂は、四無量心を表すものなのである。「白い身体における輝きは、雪に日が昇る輝きの如くである」というのは、次の通りである。完全に清浄な法界において、輪廻の概念的な把握によって覆われていない。「身体は様々な宝石の飾りをもつ」というのは、次の通りである。望ましい功德を捨てておらず、自らの立場において、口（言語活動）より、必要とされ望まれた功德の集まりが生ずるのである。「微笑む表情を有する」というのは、次の通りである。微笑む顔の表情から光が生じてから、六道の生類を満足させる法の声を修習するのである。「右の第一の手が真珠の輪（数珠）を持つ」というのは、次の通りである。真珠の輪は、途切れることのない慈悲によって、大悲者（観自在）は生類を輪廻から悟りへと導くのである。「左の第一の手が蓮華の茎を持つ」というのは、次の通りである。大悲者（観自在）は輪廻において生類を利益なさるけれども、輪廻の煩惱や分別によって覆われないのである。「下方の二本の手が胸の上で結ばれている（合掌する）」というのは、次の通りである。空と慈悲とが分けられないので、法性の意味において平等に結ばれるのである。

<sup>17</sup> 「一面四臂の大悲者」は、上述の本文における 2 (2) の項目で述べたが、このような姿の観自在は、バクチャルヤ校訂本『サーダナ・マラー』所説の六字観自在の成就法 (nos. 6, 7, 11) (Bhattacharyya, 1968a, pp. 26-30, 34; Sakuma, 2002, pp. 65-78; 佐久間, 2011, pp. 138, 140, 341, 349-350, 357) に説かれる。例えば、バクチャルヤ校訂本 (no. 6) の「聖なるシャダクシャリー・マハーヴィドヤー（聖六字大明）成就法」には、本尊の姿が次のように説かれる。「一切の飾りに荘厳され、白色であり、四臂を具え、左手に蓮華を持ち、右手に数珠を持ち、他の二つの手が胸の前で虚心合掌する世自在（観自在）の姿をもつものを自分自身であると瞑想すべきである」(Bhattacharyya, 1968b, 125; 佐久間, 2011, p. 341)。また、これらに類似した姿の観自在は『摩尼十万語』第 2 巻第 44 章「大悲者の化身・護法王ソツェン・ガンポによって著された成就法」にもマンダラの本尊として説かれる(佐久間, 2023a, p. 36; 佐久間, 2023b, p. 351)。

「両足が等しく組まれた脚勢(足の姿勢)で座す」というのは、次の通りである。法界と知恵とが不二であることの意味において、意(心的活動)が平等性より動かずに座すのである。「事物の現れに自性は無いとして、水に映る月のように修習するのである」というのは、次の通りである。大悲者のその身体の現れには、自性は無く、輝いており、分別は無く、不明瞭では無く、水の中の月のようにであると修習されるのである。

(Inga pa sku yongs su rdzogs pa las mngon par byang chub pa ni/ phyag mtshan 'od du zhu ba las/ bdag nyid thugs rje chen po zhal gcig phyag bzhi pa zhes pa/ thugs phyag mtshan padma de las 'od zer gyi 'phro 'dus sems can (536, 1) gyi don byas nas/ bdag nyid kyi lus thugs rje chen po'i skur gyur te/ zhal gcig ni sems can la thugs rjes mi 'gyur bar mdzad pa/ byams par mdzad pas 'dzum pa'i mdangs dang ldan pa/ spyang gnyis dmar cer gzigs pa sems can la thugs rjes gzigs pa'o// phyag bzhi tshad med pa bzhi'o// sku mdog dkar la 'tsher ba gangs la nyi ma shar ba lta bu zhes pa/ chos kyi dbyings rang bzhin gyi rnam par dag pa la 'khor ba'i rtog 'dzin gyis ma gos pa'o// sku rin po che sna tshogs kyi brgyan pa zhes pa/ 'dod pa'i yon tan ma spangs rang sar ngag nas dgos 'dod phun su mtshogs pa 'byung ba'o// zhal 'dzum pa'i mdangs dang ldan pa zhes pa zhal 'dzum pa'i mdangs nas 'od zer bkye nas/ 'gro drug sems can tshim par mdzad pa'i chos sgra sgoms pa'o// g'yas kyi dang po mu tig gi phreng ba zhes pa/ mu tig gi phreng ba snying rje rgyun chad med pas/ sems can 'khor ba nas byang chub tu 'dran (sic.)<sup>18</sup> pa'o// g'yon gyi dang po padma'i sdong po zhes pa/ 'khor bar sems can gyi don mdzad kyang 'khor ba'i nyon mongs pa dang rnam rtog gi skyon gyis ma gos pa'o// tha ma gnyis thugs kar thal mo sbyar zhes par stong pa snying rje dbyer med pas chos nyid kyi don la mnyam par sbyor ba'o// zhabs gnyis mnyam pa'i skyil krungs su bzhugs pa zhes pa/ dbyings dang ye shes gnyis su med pa'i don la thugs mnyam pa (537, 1) nyid las mi g'yo bar bzhugs pa'o// snang la rang bzhin med pa chu zla lta bur sgom mo zhes pa/ thugs rje chen po de sku snang la rang bzhin med pa/ gsal la rtog pa med pa ma bsgrigs pa chu nang gi zla ba lta bur sgom par bya'o//)

#### [6] 第六の身(身体活動)、口(言語活動)、意(心的活動)の加持

##### [6.0] 全体説明

「第六の身、口、意の加持をして、刻印する」というのは、次の通りである。一切の善逝(仏)の身、口、意の精髓の三つの文字によって、身、口、意の三つを加持する。金剛の鎧によっても傷つけずに刻印するのである。

(drug pa sku gsung thugs byin gyis brlab (sic.)<sup>19</sup>...cing rgyas gdab pa ni zhes pa/ bde bar gshegs pa thams cad kyi sku gsung thugs kyi sning po yi ge 'bru gsum gyis lus ngag yid gsum byin gyis brlabs/ rdo rje go chas kyang mi tshugs par rgyas gdab po/)

##### [6.1] 身の加持

「頭頂に、4つの輻のある輪の中心に白いオームの文字」というのは、次の通りである。大悲者として修習した自分自身の頭骨の上の4つの輻のある白い輪の中央に、白いオームの文字、即ち一切の善逝の身体の精髓を思念する。それより光を広げて、三世の善逝の身体に光を当てて、善逝の身体が喜ぶ供物を捧げる。身体を加持して、こちらに集める。光がオームの文字に溶けるのを修習するのである。

(spyi bor 'khor lo rtsibs bzhi pa'i lte ba la om dkar po zhes pa/ rang thugs rje chen por bsgoms pa'i spyi bo rus pa'i steng du 'khor lo dkar po rtsibs bzhi pa'i dbus su/ om dkar po/ bde bar gshegs pa thams cad kyi sku'i ngo bor bsam/ de las 'od 'phros pas/ dus gsum gyi bde bar gshegs pa'i sku la 'od zer phog pas sku mnyes pa'i mchod pa phul/ sku'i byin...rlabs (sic.)<sup>20</sup> tshur bsdus nas om la thim par sgom mo//)

<sup>18</sup> 現在の正書法では'dren が正しい綴りである。

<sup>19</sup> 現在の正書法では brlabs が正しい綴りである。

<sup>20</sup> 現在の正書法では brlabs が正しい綴りである。

## [6. 2] 口の加持

「喉にある四つの花卉のある蓮華の中心に、白いアハの文字を観想する」というのは、次の通りである。喉にある四つの花卉のある赤い蓮華の中央に、赤いアハの文字を観想する。それを一切の善逝の口の精髓であると思念する。それより光を広げて、三世の一切の善逝に当てて、善逝の口（言語活動）が喜ぶ供物を捧げる。身体を加持して、こちらに集める。光がアハの文字に溶けるのを修習するのである。

(mgrin par padma 'dab ma bzhi pa'i lte ba la aḥ dmar po zhes pa/ mgrin par lce'i rtsa bar padma dmar po 'dab ma bzhi pa'i dbus su aḥ dmar po/ bde bar gshegs pa thams cad kyi gsung gi ngo bor bsam/ de las 'od zer 'phros pas/ dus gsum gyi bde bar gshegs pa thams cad kyi gsung la phog pas gsung mnyes pa'i mchod pa phul/ gsung gi byin...rlabs (sic.)<sup>21</sup> tshur bsdu nas/ aḥ la thim par sgom mo//)

## [6. 3] 意の加持

「心臓にある十字金剛の中心に青黒いフォームを観想する」というのは、次の通りである。心臓の内部の空洞にある青黒い十字金剛の中央に、一切の善逝の意の精髓である暗い青のフォームを思念する。それより光を広げ、三世の一切の善逝に当てて、善逝の意が喜ぶ供物を捧げる。意を加持して、こちらに集めて、光がフォームの文字に溶けるのを修習するのである。

(snying kar rdo rje (538, 1) rgya khram gyi lte ba la hūṃ sngon po zhes pa/ snying khong stong du rdo rje rgya khram sngon po'i dbus su/ bde bar gshegs pa thams cad kyi thugs kyi ngo bo hūṃ mthing nag cig bsam/ de las 'od 'phros pas dus gsum gyi bde bar gshegs pa thams cad kyi thugs la phog pas thugs mnyes pa'i mchod pa phul/ thugs kyi byin...rlabs<sup>22</sup> tshur bsdu nas hūṃ la thim par sgom no//)

## [6. 4] 一切の加持

「臍にある月輪の上にある白いフリーヒの文字が六字によって囲まれているのを思念する」というのは、次の通りである。フォームの文字が臍にある月輪の上の親指から中指までの長さほどの輪の中央に、大悲者の精髓である白いフリーヒの文字があり、それが「オーム、マニパドメー、フォーム」という六字の精髓（六字真言）<sup>23</sup>によって取り囲まれていると修習する。それより光を広げて、三世の一切の善逝に当てて、身、口、意と功德と知性から一切の善逝が喜ぶ供物を捧げて、こちらに集め、光が文字に溶けて、自らが身、口、意と功德と知性から一切の加持を有するものとして、思念するのである。

(lte bar zla ba'i dkyil 'khor gyi steng du hrīḥ dkar po la yi ge drug pas skor bar bsam mo// zhes pa lte ba'i thad ka'i phyir zla ba'i dkyil 'khor mtho gang tsam zhig gi dbus su/ thugs rje chen po'i yang snying hrīḥ dkar po zhig la/ om ma ṇi padme hūṃ/ zhes pa'i snying po yi ge drug pas bskor nas yod par sgom/ de las 'od zer 'phros pas/ dus gsum gyi bde bar gshegs pa thams cad la phog pas sku gsung thugs yon tan 'phrin las thams cad mnyes pa'i mchod pa phul nas/ tshur 'dus yig 'bru rnam la thim pas/ sku gsung thugs yon tan 'phrin las thams cad kyi byin...rlabs (sic.)<sup>24</sup> dang ldan par bsam mo//)

## [6. 5] 金剛の鎧・火山の輪の観想

「頭頂において白いフリーヒの文字が溶けて金剛の鎧となるのを思念するのである」というのは、次の通りで

<sup>21</sup> 現在の正書法では brlabs が正しい綴りである。

<sup>22</sup> 現在の正書法では brlabs が正しい綴りである。

<sup>23</sup> 六字真言は、敦煌出土の 10 世紀頃のチベット語文書にも知られるが (Imaeda, 1979)、チベット仏教文献に集中的に説かれるようになるのは 12 世紀以降であるとされる (Schaik, 2006, p. 67)。『摩尼十万語』では、観自在と六字真言の功德が大いに宣伝されている (Ehrhard, 2013; 榎殿 2021a)。なお、六字真言の語義については、佐久間 (2011, pp. 182-183, 注 2) を参照。

<sup>24</sup> 現在の正書法では brlabs が正しい綴りである。

ある。自分自身に障害によって傷つけられることがないように、金剛の鎧によって刻印される。頭頂において白いフリーヒの文字が溶けて、身体の頭から足までを満たすことによって、一切の毛穴が指の幅ほどの金剛によって満ち、金剛の輪によって囲まれ、何物も破れず傷つけられないのを思念するのである。「自らの端は、火の塊によって囲まれているのを思念して、刻印する」というのは、次の通りである。自らが大悲者の身体であると修習する。その身体の端では、自らが白、黄、赤、青等の火山によって囲まれていると思念する。障害物が自らに近づくことができない防護の火山の輪によって刻印されるのである。

(spyi bor yig ge hrīh dkar po zhig zhu bas rdo rje'i go khrab tu bsam mo// zhes pa rang la bar chad kyis mi tshugs par bya ba'i phyir/ rdo rje go chas rgyas gdab ste/ sbyi bor hrīh dkar po zhig zhu ba las lus kyi mgo zhabs su khyab pas/ ba spu'i bu ga thams cad rdo rje mtshan gang bas gtams/ rdo rje'i phreng bas bskor nas cis kyang mi shigs mi tshugs par bsam mo// rang gi mtha' ma me dpung (539, 1) gis skor bar bsams la rgyas gdab po zhes pa/ rang thugs rje chen po'i skur bsgoms pa de'i mtha' mar me ris dkar po dang/ ser po dang/ dmar po dang/ sngon po la sogs pas skor bar bsam/ bar chod bgegs kyis nye mi nus pa'i bsrung ba'i 'khor lo me ris rgyas gdab po//)

#### [6. 6] 付随的な観想

付随的に、眷属を生じたいと望む者が飾りを好むのであれば、次の通りに観想する。一切の三千大千世界が千の花弁のある蓮華の仏国土となる。「オーム、マニパドメー、フーム」と唱えて、各々の蓮華に各々の仏が座っているのを思念するのである。

(zhor la 'khor skyed par 'dod pas spros pa la dga' na/ stong gsum gyi stong chen po'i 'jig rten gyi khams thams cad padma 'dab ma stong dang ldan pa'i sangs rgyas kyi zhing khams su gyur/ om ma ni padme hūm/ zhes brjod pas/ padma re re la yang sangs rgyas re re bzhugs par bsam mo//)

#### [6. 7] 要約的な観想<sup>25</sup>

要約を好むのであれば、次の通りに観想する。白く最高の悟りの印を有する毘盧遮那仏を十八の蓮弁の中央の六つに、深い青の触地印の金剛薩埵を東に、黄色く与願印を有する宝生仏を南に、赤く定印を有する阿弥陀仏を西に、緑で守護を与える印を有する不空成就仏を北に観想する。三世の一切の仏は、勝者の五部族に集約される。それに続いて六つの蓮華に、次の女神たちが存するのを観想する。黄色く経函を持つ般若波羅蜜女神を中央の蓮華に、青黒く定印を示す禅定波羅蜜を東の蓮華に、黄色く与願印を示す布施波羅蜜を南の蓮華に、赤く足輪の印をもつ戒波羅蜜を西の蓮華に、緑で守護を与える忍辱波羅蜜を北の蓮華に、黄色く経函を持つ精進波羅蜜が北東の蓮華に観想する。三世の女神たちは、これらの六波羅蜜の女神に集約されるのである。それに続いて六つの蓮華の中、天から落ちた神の苦しみを取り除いて、聖者であるヴィーナー（琵琶）を持つ白いインドラを中央の蓮華に、阿修羅の争いの苦しみを取り除いて、鎧を持つ青黒い阿修羅の聖者を東の蓮華に、人間となった者の苦しみを取り除いて、人の聖者である托鉢の鉢と杖<sup>26</sup>を持つ黄色い釈迦牟尼を南の蓮華に、畜生の苦痛の苦しみを取り除いて、畜生の聖者である本を持つ青黒い釈迦獅子を西の蓮華に、餓鬼の飢えと渴きの苦しみを取り除き、餓鬼の聖者である宝の箱を持つ赤い虚空庫を北の蓮華に、地獄の暑さと寒さの苦しみを取り除き、地獄の聖者である火と水を持つ黒い法王を北東の蓮華に観想する。六人の聖者によって、六道の苦しみを取り除いて、六道の一切の生類が六人の聖者になるのを修習するのである。

(bsdus pa la dga' na padma 'dab ma bco brgyad kyi dbus kyi drug la/ sangs rgyas rnam par snang mdzad dkar po byang

<sup>25</sup> この観想における諸尊の配置図は、Trizin Tsering Rinpoche (2007, vol. I, Plates H, I, p. xx, xxi, p. 820) に掲載される。図の中央に般若波羅蜜女神が存するが、それ以外の女神は省略される。また、この図には、六字観自在の姿は無い。さらに、この図では、六道の救済者はすべて釈迦牟尼であるが、[6. 7] 要約的な観想では、インドラ、阿修羅、釈迦牟尼、釈迦獅子、虚空庫、法王と述べられる。

<sup>26</sup> 原文には *seg shang* とあるが、これでは意味が取れない。英訳 (Trizin Tsering Rinpoche, 2007, vol. I, p. 820) に *an alms bowl and staff* とあり、これに従った。

chub mchog gi phyag rgya can/ shar du rdo rje sems dpa' mthing kha sa non gyi phyag rgya can/ lhor rin chen 'byung ldan ser po mchog sbyin gyi phyag rgya can/ nub tu snang ba mtha' yas dmar po mnyam bzhag gi phyog rgya can/ byang du don yod grub pa ljang khu (sic.)<sup>27</sup> skyabs sbyin gyi phyag rgya can/ dus gsum gyi sangs rgyas thams cad rgyal ba rigs lngar bsdus la sgom mo/ de'i phyir rim padma drug la/ dbus su shes rab kyi pa rol tu phyin ma ser mo glegs bam can/ shar du bsam gtan gyi pha rol tu phyin ma sngon mo mnyam bzhag can/ lhor sbyin pa'i pha rol tu phyin ma ser mo mtshog sbyin can/ nub tu tshul khriims kyi pha rol tu phyin ma dmar mo rkang gdub kyi phyag rgya can/ byang du (540, 1) bzod pa'i pha rol tu phyin ma ljang khu (sic.)<sup>28</sup> skyabs sbyin can/ byang shar du brtson 'grus kyi pha rol tu phyin ma ser mo glegs bam can no// dus gsum gyi lha mo thams cad pha rol tu phyin pa drug gi lha mor bsdus la sgom mo// de'i phyir rim padma drug gi nang/ dbus kyi padma la lha lhung ba'i sdug bsngal sbyangs nas lha'i thub pa brgya byin dkar po pi wang can/ shar du lha ma yin 'thab rtsod kyi sdug bsngal sbyangs nas lha ma yin gyi thub pa sngon po go cha can/ lhor mi 'gyur ba'i sdug bsngal sbyangs nas mi'i thub pa shakya thub pa ser po seg shang can/ nub tu byol song bkol spyad kyi sdug bsngal sbyangs nas byor song gi thub pa shakya seng ge sngon po po ti can/ byang du yi dags (sic.)<sup>29</sup> bkres skom gyi sdug bsngal sbyangs nas yi dags (sic.)<sup>30</sup> kyi thub pa nam mkha' mdzod dmar po rin po che'i sngom bu can/ byang shar du dmyal ba tsha grang gi sdug bsngal sbyangs nas dmyal ba'i thub pa chos rgyal nag po me chu can/ thub pa drug gis 'gro ba rigs drug gi sdug bsngal sbyangs nas/ 'gro drug gi sems can thams cad thub pa drug tu gyur par sgom mo//)

#### [6. 8] 極めて要約的な観想

極めて要約的な観想を好むなら、本尊の前方に存する六字の女神<sup>31</sup>は、父（男神である六字観自在）と同様の身色と持物なのである。本尊の右には、宝石の棒を持つ息子である白いマニダラ<sup>32</sup>が、本尊の左には、水晶の輪を持つ白い娘のヴィディヤダラ（持明者）<sup>33</sup>が存する。六道の一切の生類は、大悲者の身体に他ならないと修習するのである。

(shin tu bsdus pa la dga' na/ mdun du yum yi ge drug ma sku mdog phyag mtshan yab dang 'dra'o// g' yas su sras nor bu 'dzin pa dkar po rin po che'i sdong bu 'dzin pa/ g'yon du sras mo rigs sngags 'dzin ma dkar mo shel phreng 'dzin pa/ 'gro ba rigs drug gi sems can thams cad thugs rje chen po'i sku (541, 1) sha rtag tu sgom mo//) (MKB, vol. I, 541, 1)

## 4. まとめ

上述の『摩尼十万語』の「大悲者の成就法」の「三摩耶薩埵の輪の修習」には、インド密教のバッタチャルヤ校訂本『サーダナ・マーラー』所説の六字観自在の成就法、及び『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』所説の「六字大明マンダラ」と比べて、次のような共通点と相違点が認められる。

<sup>27</sup> 現在の正書法では gu が正しい綴りである。

<sup>28</sup> 現在の正書法では gu が正しい綴りである。

<sup>29</sup> 現在の正書法では dwags が正しい綴りである。

<sup>30</sup> 現在の正書法では dwags が正しい綴りである。

<sup>31</sup> 六字真言の女神化である「六字大明」(Ṣaḍakṣarī-mahāvidyā)を意味する。この女神は、バッタチャルヤ校訂本『サーダナ・マーラー』所説の六字観自在の成就法 (Bhattacharyya, 1968b, p. 27; 佐久間, 2011, pp. 140, 341)、及び『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』所説の「六字大明マンダラ」に説かれる (Mallmann, 1948, p. 44; Vaidya, 1961, p. 296; 田中, 1990, p. 183; 佐久間, 2011, p. 139-140)。

<sup>32</sup> マニダラは、バッタチャルヤ校訂本『サーダナ・マーラー』所説の六字観自在の成就法 (Bhattacharyya, 1968b, p. 27; 佐久間, 2011, pp. 140, 341) 及び『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』所説の「六字大明マンダラ」に説かれる (上記の注 31 を参照)。

<sup>33</sup> ヴィディヤダラ（持明者）は、『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』所説の「六字大明マンダラ」に説かれる (上記の注 31 を参照)。

この成就法には、本尊として一面四臂の観自在が説かれるが、これに類似した姿の観自在は、『サーダナ・マーラー』所説の六字観自在の成就法 (nos. 6, 7, 11) にも述べられる。また、[6. 8] 「極めて要約的な観想」において本尊の脇侍として説かれる六字の女神 (六字大明) とマニダラは、『サーダナ・マーラー』所説の六字観自在の成就法 (nos. 6)、及び『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』所説の「六字大明マンダラ」に見出される。さらに、ヴィディヤダラ (持明者) は、『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』所説の「六字大明マンダラ」に説かれる。

他方、[6. 7] 「要約的な観想」に説かれる本尊の周囲に存する諸尊、即ち毘盧遮那仏、金剛薩埵、宝生仏、阿彌陀仏、不空成就仏、般若波羅蜜等の六波羅蜜の女神、インドラ等の六人の聖者は、『サーダナ・マーラー』所説の六字観自在の成就法 (nos. 6, 7, 11, 12) には説かれていない<sup>34</sup>。また、『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』所説の「六字大明マンダラ」には、本尊である阿彌陀の脇侍として六字大明とマニダラとが説かれる。しかし、そこには、「要約的な観想」に説かれる諸尊、即ち毘盧遮那仏、金剛薩埵、宝生仏、不空成就仏、般若波羅蜜等の六波羅蜜の女神、インドラ等の六人の聖者は述べられていない。

以上のように、第 1 巻セクション 8 に含まれる「大悲者の成就法」の「三摩耶薩埵の輪の修習」の部分訳とテキスト・ローマナイズを行うことによって、マンダラ観想の一部を解明するとともに、インド密教における六字観自在の成就法、及び『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』所説の「六字大明マンダラ」との共通点と相違点を指摘することができた。これらは、チベット仏教における観自在信仰の受容と変容の一側面を示すものと考えられる。なお、今回取り上げた「三摩耶薩埵の輪の修習」の後には、三摩耶薩埵と対になる智薩埵の観想が説かれており、これらの総合的な研究は、今後の課題としたい。

#### 【謝辞】

本稿は、2023 年度科学研究費助成事業・基盤研究 (B) (一般) 「チベットにおける観音信仰の受容と変容 : 『王統明鏡史』と『摩尼十万語』を中心に」 (課題番号 21H00476) (研究代表者 佐久間留理子) による研究成果の一部である。

#### 【引用・参考文献】

・一次文献

【日本語文献】

堀内寛仁 (編著) (1983) 『梵漢蔵対照 初会金剛頂経の研究 梵本校訂 (上)』密教文化研究所

【外国語文献】

Tranyang and Jamyang Samten (Reproduced) (1975), *Ma ni bka' 'bum: A Collection of Rediscovered Teachings Focusing upon the Tutelary Deity Avalokiteśvara (mahākaruṇika)*. vol. I, vol.II, New Delhi. (MKB)

Bhattacharyya, Benoytosh (Ed.) (1968a), *Sādhnamālā*. Gaekwad's Oriental Series, no. 26, Baroda: Oriental Institute (Original work: 1925).

Sakuma, Ruriko (Ed.) (2002), *Sādhnamālā: Avalokiteśvara Section, Sanskrit and Tibetan Texts*. Asian Iconography Series III, Delhi: Adroit Publishers.

Vaidya, P. L. (Ed.) (1961) *Mahāyānasūtrasamgraha*, Part 1, Buddhist Sanskrit Texts no. 17 (pp. 258-308), Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

・二次文献

【日本語文献】

石濱裕美子 (2001) 『チベット仏教世界の歴史的研究』ブッキング

奥山直司 (1989) 「イコンの園へ—パンコル・チョルテン研究序説—」『チベット・曼荼羅の世界』小学館、pp. 131-168.

肥塚隆 (1967) 「瞑想と造形—インド美術における一つの基礎概念—」『南都仏教』20, pp. 60-79.

佐久間留理子 (1993) 『サーダナ・マーラー』におけるジュニャーナサットヴァとサマヤサットヴァ』『宮坂有勝博士古稀記

<sup>34</sup> ただし、阿彌陀仏を本尊の頭に化仏として頂く場合がある (no. 7)。

念論文集』(宮坂宥勝博士古稀記念論文集刊行会編)法蔵館、pp. 793-807.

佐久間留理子 (2011) 『インド密教の観自在研究』山喜房佛書林

佐久間留理子 (2023a) 『『摩尼十万語』の基礎的研究 (1) —第 2 部第 44 章の部分訳とテキストのローマナイズ—』『大阪観光大学研究論集』23: 33-43.

佐久間留理子 (2023b) 『『摩尼十万語』の護法王ソツエン・ガンポによって著された成就法—第 2 巻第 44 章から』『印度学仏教学研究』72 (1): 346-353.

清水乞 (1977) 「インド宗教儀礼と造形—『サーダナ・マーラー』を中心として—」『日本仏教学会年報』43, pp. 59-72.

立川武蔵 (2004) 「マンダラ瞑想法の特質」『印度学仏教学研究』53 (1), pp. 231-236.

立川武蔵 (2015) 『マンダラ観想と密教思想』春秋社

立川武蔵 (2021) 『仏教史』第 1 巻、西日本出版社

田中公明 (1990) 『詳解 河口慧海コレクション: チベット・ネパール仏教美術』佼成出版社

谷口富士夫 (2023) 「『マニ・カブン』に見られる仏身説の特徴」『印度学仏教学研究』72 (2): 762-768.

トウッチ・ジュセッペ (1984) 『マンダラの理論と実践』(ロルフ・ギーブル訳) 平河出版社

中村元 (2001) 『広説佛敎語大辞典』東京書籍

速水侑 (編) (2000) 『観音信仰事典』神仏信仰事典シリーズ 4、戎光祥出版

横殿伴子 (2021a) 『チベット建国神話と観自在信仰—『マニ・カンブン』「偉大なる歴史章を中心に」—』起心書房

横殿伴子 (2021b) 『『マニ・カンブン』における如来蔵思想』『印度学仏教学研究』69 (2): 806-810.

森雅秀 (2000) 「インドにおける成就法と儀礼」『高野山大学論叢』35, pp. 23-43.

山口瑞鳳 (1988) 『チベット下』東京大学出版会

[外国語文献]

Bhattacharyya, Benoytosh (1968b) *The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.

Das, Chandra (1983) *Tibetan-English Dictionary (Compact Edition)*. Kyoto: Rinsen Book Company.

Ehrhard, Franz-Karl (2013) The Royal Print of the *Maṇi Bka' 'bum*: Its Catalogue and Colophon. In *Nepalica-Tibetica: Festgabe for Christoph Cüppers*, Band 1, Franz-Karl Ehrhard & Petra Maurer (ed.) International Institute for Tibetan and Buddhist Studies GmbH, pp. 143-172.

Imaeda, Yoshiro (1979) Note préliminaire sur la formule Om maṇi padme hūṃ dans les manuscrits tibétains de Touen-Houang. In *Contributions aux Études sur Touen-Houang*. Genève-Paris: Librairie Dorz.

Kapstein, Matthew (1992) Remarks on the *Maṇi bKa'-'bum* and the Cult of Avalokiteśvara in Tibet. In *Tibetan Buddhism: Reason and Revelation*. Goodman, Steven D & Ronald M. Davidson (eds.) Albany, NY: SUNY.

Mallmann, Marie-Thérèse (1948) *Introduction à l'étude d'Avalokiteśvara*. Annales du Musée Guimet, Bibliothèque d'Étude-Tome Cinquante-Septième, Paris: Civilisation du Sud.

Schaik, Sam Van (2006) The Tibetan Avalokiteśvara Cult in the Tenth Century: Evidence from the Dunhuang Manuscripts. In *Tibetan Buddhist Literature and Praxis: Studies in Its Formative Period 900-1400*. pp. 55-72.

Trizin Tsering Rinpoche (Trans.) (2007), *Maṇi kabum*. vol. I, vol. II. Singapore: [s. n.].